

中学生の社会的行動についての研究（99） －問題行動のパターンの縦断的推移－

○ 井上裕光（千葉県立保健医療大学）
二宮克美（愛知学院大学）
山本ちか（名古屋文理大学短期大学部）

氏家達夫（名古屋大学）
五十嵐 敦（福島大学）

【目的】中学生の社会的行動の発達的变化の指標として、逸脱行動（問題行動）についての変化がある。ここでは、問題行動について縦断的に検討した、西野ら(2009)のモデルについて、縦断データの LCA（潜在クラス分析）及び LTA（潜在遷移分析）により、内的基準による分類を試みた。

【方法】一般化のために二地点での測定を行った。＜調査協力者＞愛知は名古屋大都市圏の 2 都市の 9 つの中学校の生徒とその両親、福島は福島県の 1 都市の 5 つの中学校の生徒とその両親。子どもと両親の回答がすべて揃って回収した（3 時点：1 回目・4 回目・7 回目）2,836 組中、性別など基本情報を満たしている 2,302 組で、さらに、問題行動に

		性別		合計
		男	女	
地域	名古屋	704	651	1355
	福島	464	483	947
合計		1168	1134	2302

関する回答に 3 時点とも欠損

値がないケース 491 組を対象とした。なお、全時点での測定状況は以下の表の通りである。

	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	5 回目	6 回目	7 回目
中学 1 年	02 年 9 月 1541/2836						
	03 年 2 月	1616/2834					
中学 2 年	03 年 6 月		1225/2477				
	03 年 9 月			1057/2477			
	04 年 2 月				1484/2477		
中学 3 年	04 年 6 月					1337/2068	
	04 年 9 月						1478/2283
父親	1249/2836			655/2477		609/2283	
母親	1598/2836			752/2477		702/2283	

＜調査方法＞各中学校を通して、各家庭に配布し、回答後に配布時の封筒に入れ、封をしてから学校に提出してもらった。＜質問項目＞問題行動とは、警察庁生活安全局(1999)による、右表 22 項目である。＜回答形式＞各項目に対し、過去 3 か月間にどの程度したかを 4 件法「一度もなかった」「一度だけあった」「数回あった」「何度もあった」で評定し、それぞれ 1 点から 4 点と得点化した。

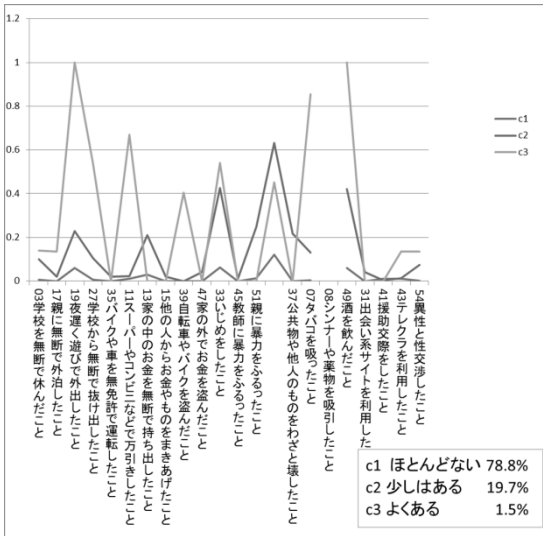
【結果】全体の一次元性を確認したが、全体としての分布は非常に偏ったものであった。また、最小 22 点（すべて一度もない）と回答した生徒は時点 1 で 50.1%，時点 4 で 51.9%，時点 7 で 50.5%，また最大は時点 1 で 72 点，時点 4・7 では全項目何度もあった 88 点まで広く分布しているが、不適切な回答者が含まれている可能性もある。そのた

め、「一度もない／一回はあった」の 2 件法 (0/1)

規則違反	03 学校を無断で休んだこと
	17 親に無断で外出したこと
	19 夜遅く遊びで外出したこと
	27 学校から無断で抜け出したこと
	35 バイクや車を無免許で運転したこと
盗み	11 スーパーやコンビニなどで万引きしたこと
	13 家の中のお金を無断で持ち出したこと
	15 他人からお金やものをまきあげたこと
	39 自転車やバイクを盗んだこと
	47 家の外でお金を盗んだこと
攻撃性	33 いじめをしたこと
	45 教師に暴力をふるったこと
	51 親に暴力をふるったこと
	55 自分と同じ年ごろの人に暴力をふるったこと
	37 公共物や他人のものをわざと壊したこと
破壊	07 タバコを吸ったこと
喫煙・飲酒・薬物	25 シンナーや薬物などを吸引したこと
	49 酒を飲んだこと
性	31 出会い系サイトを利用したこと
	41 援助交際をしたこと
	43 テレクラを利用したこと
	54 異性と性交渉したこと

で再数値化し、最低 0 ～最高 22 点で内的基準による分類を試みた（性別情報は使っていない）。時点 1 は、

項目 25 のシンナーや薬物が該当なしとなったため除外した。図は時点 1 の 3 クラス（ほとんどの



い 78.8%，少しはある 19.7%，よくある 1.5%）に分かれている。時点 4 は（85.1%，13.2%，1.6%），時点 7 では（89.1%，9.7%，1.2%）となっているが、学年進行で「よくある」クラスが明確に分かれる結果となった。＜科研費・基盤研究(B) (1)14310055（代表 氏家達夫）の補助をうけた＞